

# 事件は教室で起きています？

校長 山田 浩之

新潟小学校には、学校の重要な事柄を話し合い、決める、運営委員会という会議があります。この時期は、来年度の計画を話し合ったり、決めたりします。先日の運営委員会で、予定していた議題がすべて終わり、会議に参加していた職員に問いかけました。

「来年度、どのような授業を目指したいか。自分の考えを話してほしい。」

- 考えることを楽しめる授業
- 生徒指導的課題が解決していく授業
- 子どもと子ども、子どもと教師が、考えていることを伝え合う授業
- しつとりとした授業
- 新しい考えを構築する授業
- 書く、スピーチ、プレゼン等、表現を重視した授業
- すべての子どもが分かる、できる、協働する授業
- 活動を通して分かり、できることで学ぶ楽しさを実感する授業
- できないことができる授業
- 違いを認め合える授業
- 学習課題が工夫されていて子どもが熱中する授業

紙幅の関係で、これでも、半分くらいに削りました。どれも、子どもにとっていい授業だなど思うと同時に、なぜか少し古い映画の、ある俳優が叫んでいるセリフを思い出しました。「事件は会議室で起きてるんじゃない。現

場で起きてるんだ。」このセリフの「事件」を「授業」に「現場」を「教室」に置き換えて、一人心の中で「そうだ、授業は会議室ではなく、教室でドラマとなっているのだ」と考えました。

もちろん、学校教育の内容の基本的な部分は、法令によって定められています。また、学校も教育活動の方針を定めています。学年で授業のやり方を話し合うこともあります。しかし、実際に授業を行うのは一人一人の担任であり、授業担当者です。どの教材をどのように扱うか、どこを切り口にして子どもに興味をもたせるか、つまづいている子どもにどのような声をかけるか、適切ではない友達との関わりはどこまでは許すけど、どこからは許さないのか、やり残した課題を宿題にするか、明日続きをするか。これらは、みな、教員一人一人に任されていることです。そこには、その教員の個性と経験、技能、考え方（教育観）が現れてきます。だから、授業は教室でドラマになっているのです。そして、教員一人一人の多様性があるから学校は面白く、楽しいのです。

件の俳優は、ドラマの中でこうも言っています。「所轄（学校）は事件（授業）一個一個じっくりやらせてもらいますから。刑事（教師）は物を扱っている商売じゃない。扱っているのは人間だから。」